

寄稿文

# 夏の終わりに思うこと

室蘭工業大学大学院工学研究科

木村 克俊 教授



毎年、夏の週末には、海の事故による犠牲者のニュースが流れる。海水浴や釣りといったレジャー中に波にさらわれる事例が後と絶たない。誠に痛ましい限りである。

テレビ等の報道では、犠牲者の自己責任が強調されることが多いが、果たしてそれだけ事故が防止できるか疑問である。私自身は10年ほど前に国の研究機関から大学に移ってから、高波から家屋、車、そして人を守るための研究をするようになった。その際、海岸の管理者、市町村役場の海岸担当者、气象台、海上保安部など、各方面の方と接触するうちに高波による人身事故の背後にある課題が見えてきた。

一つ目は、波に対する情報不足である。気圧配置によっては波高が急激に大きくなることがある。テレビ等の天気予報で報じられる波の高さは、沖合20海里（約38km）海域における波高である。海底地形や、波の周期や波向き、風向きによって海岸に到達する波が変化する。地元の漁業者は、長年の経験で来襲する波の特長を十分把握している。しかしながらその海岸を訪れる回数の少ない人にとっては、的確な予測が難しい。

二つ目は、波の不規則性への知識不足である。天気予報で用いられる波の高さは「有義波（ゆうぎは）」と呼ばれる波の高さである。経験的には「熟練者の目視波高」、統計的には「大きいほうから1/3の数の波の波高の平均値」で定義される。最大の波は、20～30分の間に1回程度出現し、有義波の1.6～2.0倍程度の波高となることがある。突然押し寄せる巨大な波によって、岩場や防波堤の上に立つ人が倒されたり流されたりする例が少なくない。

三つ目は、自分自身の危険度に対する認識不足である。秋サケのシーズンには、ゴム製胴長を着て海の中に入って釣りをする光景を良く見かける。万一転倒して胴長に海水が入ってしまうと簡単に立ち上がれない。日高沿岸ではコンブ拾いの漁業者に同様な事故が発生していることから、私の研究室で学生と一緒に簡単な実験をしたことがある。それによると、人の膝から腰の水深まで、わずか数十cm深くなっただけで、浮力と波高の増大効果により、人が転倒する危険性が著しく増大することが分った。自分の立つ場所の安全度を適切に判断することが重要である。

海は人々にとって非常に魅力的な場所である。正しい知識と確かな情報に基づいて「自分自身の安全は自分で守る」といった認識が広まれば、海のレジャー中の事故の多くは防げるはずである。今こそ、海に関わる公的機関や研究機関が総力を結集して、こうした事故防止に取り組む必要を感じている。